

新進芸術家海外研修制度 研修結果報告書

研修開始年度 | 令和 3 (2021) 年度

分野 | 美術 (美術館教育、インクルーシブアート)

研修先 | オランダ (アムステルダム)

研修期間 | 1 年研修

氏名 | 佐藤 麻衣子

1. 研修目的（課題）

アーティストと精神障害者の関わりから生じる、美術の有用性の事例調査が目的である。

わたしは、美術館での教育普及学芸員、およびフリーランスのアートエデュケーターとして、社会的包摂プログラムを軸に企画してきた。課題は、収入や来場者数では測定できない美術の効果を伝え、継続的な理解を得ることだった。

研修先は、精神科病院でアーティストインレジデンスを長年にわたり運営している。作品を通じて精神疾患への差別や偏見を翻訳・可視化でき、これらの作品を展示することで、社会に対して問題を訴えかけられると理念を掲げている。

今後のキャリアにおいても、社会的弱者への理解を深めるべく、社会的包摂プログラムに携わりたいと考えており、先行事例の調査を通じて得た知見を実践につなげるための研修である。

2. 研修日程

研修先 : フィフスシーズン、ビューティフルディストレス

所在地 : オランダ（アムステルダム）

指導者 : エスター・フォセン（フィフスシーズンディレクター／キュレーター）

ウィルコ・タウネブライヤー（ビューティフルディストレスディレクター）

研修期間 : 令和3(2021)年11月18日～令和4(2022)年10月26日

3. 研修内容、成果

A) 研修課題の題目

【課題】

研修課題の大枠は以下の3点である。

1. 研修先のこれまでの活動と今後の展開の調査
2. 美術と精神疾患の相関関係の検証
3. 社会への普及と理解促進のための事例と効果の検証

【研修内容・方法】

○第1四半期（11月～1月）：研修先のインタビュー調査

1. キュレーターから見た精神医療

内容：レジデンス事例／美術が精神医療や社会にもたらす効果／学生や医師を対象とした教育プログラムの有用性

方法：インタビュー調査

対象：エスター フォセン、スザンヌ オクセナー（フィフスシーズン）

2. 精神科医から見た美術

内容：アーティスト滞在時のエピソードや所感／医療（治療）との相違点／精神医療から見た美術の効果

方法：インタビュー調査

対象：ウィルコ タウネブライヤー、カイパース フルール（ビューティフルディストレス）

○第2 四半期（2月～4月）：研修先関係者へのインタビュー調査

1. アーティストから見た精神医療

内容：制作作品について／レジデンス滞在中のエピソード（患者との交流や滞在中の試み）／レジデンス前後の制作や考え方の変化

方法：インタビュー調査、展示調査

対象：レジデンス滞在アーティスト

2. 患者、医療従事者から見た美術

内容：アーティスト滞在時のエピソードや所感／医療（治療）との相違点／精神医療から見た美術の効果

方法：インタビュー調査

対象：患者やその家族、医療従事者

○第3 四半期（5月～7月）：継続的な運営と新たな展開についてインタビュー調査、類似事例調査

内容：レジデンスの設立や運営方法／長期継続のためのポイント／精神科病院内にあるレジデンスの留意点／アメリカでの事例／他国（遠隔）での構築方法／他組織の類似事例調査

方法：インタビュー調査、展示調査

対象：フィフスシーズン・ビューティフルディストレススタッフ、他組織のスタッフ

○第4 四半期（8月～10月）：社会へのアプローチ方法の事例調査、報告書まとめ

内容：美術をツールとした精神疾患の啓蒙方法／社会への影響力／社会からのフィードバックと効果測定／自己評価の方法／作品収蔵や活動のアーカイブ方法／教育機関や美術館等の社会教育施設との連携／報告書まとめ

方法：ビューティフルディストレスハウスでの展覧会やプログラムの運営方法を現場で実習

対象：フィフスシーズン・ビューティフルディストレススタッフ、関係者、来館者

B) 研修の成果

総括：研修先では新規事業がスタートし、計画通りに研修は実行できなかった。しかし、新規事業のコーディネート（茨城県大子町にある精神科病院、袋田病院とのアーティストインレジデンス事業）や研修受入担当者が企画するプロジェクトでのワークショップ実施、美術館の教育プログラム調査など、非常に充実していた。計画以外の活動についても追記していく。

大幅に達成できた

○第1四半期（11月～1月）：研修先のインタビュー調査

1. キュレーターから見た精神医療／2. 精神科医から見た美術

理由：フィフスシーズン、ビューティフルディストレスに携わる中心メンバーへのインタビュー調査を通じて、研修先の立ち上げから、現在のプログラムまで聞くことで、対象者の精神疾患と美術に対する見解を聞けることができた。

成果1：特に、フィフス・シーズンの設立者であるスザンヌ・オクセナーによって、企画実行された展示やプログラムが、オランダの社会的包摂プログラムや展示の歴史を聞いているようで興味深かった。

特筆すべきものとしては、病院での現代美術展「AHHA」（マリーナ・アブラモヴィッチブラモビッチや、シュウゾウ・アズチ・ガリバーなどが参加）、刑務所でのワークショップ。アルクマールの精神科病院での川俣正との制作は、1997年のミュンスターの彫刻プロジェクトに繋がった。
<http://www.tadashikawamata.com/newfiles/actvs.pages/1996WorkingProgressAlkmaar.html>

成果2：両者とも美術活動を行なう目的は、治療やセラピーのような効果が即時に現れるものではない。患者がアーティストと交わることで、自分自身で気づきを得ることに重きを置いている。それは当事者にとっても周囲の人にとっても、時間と胆力を要することは想像に固くないが、遅効性を大切にしている考え方を感じた。

補足

成果3：ワークショップの企画・運営

研修受入担当者エスター・フォセンが企画したプログラム「The Blueset Monday」でワークショップの企画運営を行う。日本で活動するワークショップユニットBOB ho-hoのワークショップを行った。第一四半期は上記インタビューに加え、ワークショップ準備と開催に明け暮れた。

「The Bluest Monday」でのワークショップ企画・運営



The Bluest Monday とは、ヨーロッパ圏の人にとって、気持ちが最も落ち込みやすいと言われている1月の第3月曜日。この日から1週間、外に出て展示を見たり、ワークショップに参加したりすることで、会話のきっかけが生まれ、前向きな気分になってほしいという思いが込められている企画である。

<https://thebluestmonday.nl/2022>

会期：2022年1月17日-23日

場所：De Hallen、アムステルダム

内容：水戸美術館勤務時に実施した「郵便式/POST CARD」ワークショップ（制作：BOB ho-ho）を上記企画内で実施。

The Bluest Monday メインビジュアル



ワークショップユニット BOB ho-ho デザインのポストカードに、絵や字を描き加える。



ポストカードを壁に貼り、デザインをつなげていく。

ポストカード作品は 353 枚集まった。会期前には近隣の高齢者施設や障害者施設へポストカードを配布し、参加を依頼した。前年の12月よりロックダウンが始まり、外出が困難だった施設のアクティビティとして重宝された。各施設から集まった作品を展示し、会期をスタートした。会場はトラムの元倉庫をリノベーションした商業複合施設であり、自由に通行できる。通行人たちも企画を瞬時に理解し、飛び入り参加してくれる人が多かった。



写真左：アムステルダム副市長、シモーネ・クケンハイム氏
視察にて、ワークショップに参加する様子

（クケンハイム氏の担当はヘルスケア、ユース（ケア）、職業教育、スポーツ）

達成できた

○第2 四半期（2月～4月）：研修先関係者へのインタビュー調査

1. アーティストから見た精神医療／2. 患者、医療従事者から見た美術

理 由：フィフス・シーズンでレジデンスをしたアーティスト1名に話を聞くことができた一方、患者や家族、医療従事者へのインタビューはプライバシーの問題があり、接触自体が困難だった。フィフス・シーズンに滞在したアーティストの作品が収蔵されている2箇所の美術館で、成果作品を調査することができた。

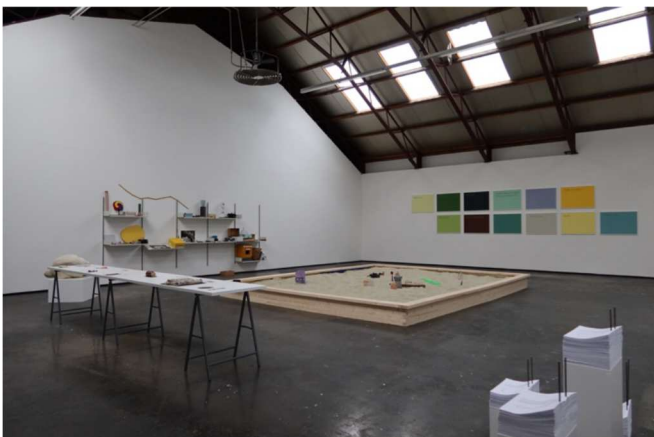
成果1：アーティストインタビュー あべさやか（2015年に滞在）に、滞在の様子と感想を聞くことができた。

レジデンス施設は患者も医療従事者も出入り自由のため、出入りする人の所属も役割も最初は分からない。作品制作の前に、まずは一人ひとりを知ろうと、患者との交流にフォーカスする。定期的に、患者との料理や体操をすることで、個人と会話や手紙のやりとりができるようになった。何が真実なのか分からなく、自分もいつかメンタルヘルスの問題を抱えることになるかもしれない、と感じる一方、施設での制作と生活、患者との交流など、バランスの保ち方に苦勞した。

成果2：フィフスシーズン、ビューティフルディストレスでレジデンスしたアーティストの作品は、オランダ国内の美術館やアートスペースで実物を見ることができた。



研修先のビューティフル・ディストレス・ハウス
(アムステルダム)



フィフス・シーズンとビューティフルディストレスが運営するアーティストインレジデンスで制作された作品が、定期的に展示されている。



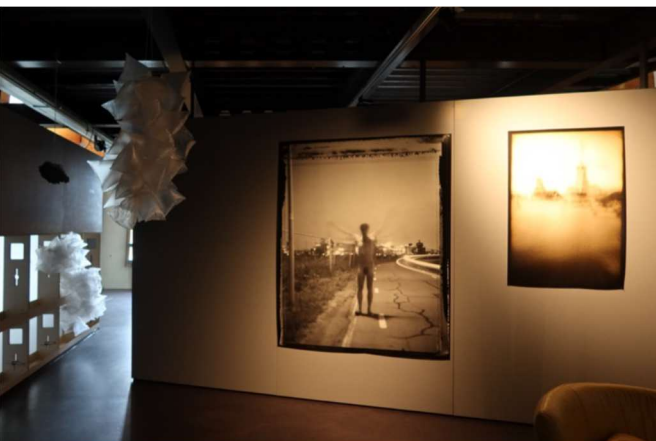
ミュージアム・オブ・ザ・マインド（ハーレム）



マリスカ・フォスカンプがフィフス・シーズンに滞在中した際に制作した作品が、コレクションされている。



ザーンズ・ミュージアム（ザンダム）



ザーンズ・ミュージアムでのマリスカ・フォスカンプの個展。フィフス・シーズンで制作された作品が展示されていた。

大幅に達成できた

○第3 四半期（5月～7月）：継続的な運営と新たな展開についてインタビュー調査、類似事例調査

理由：事業のアシスタントを通じて、運営方法についてスタッフから具体的に聞くことができたため

成果1：運営方法で、最も印象的だった点は、アーティストは制作する作品や施設での行動に細かく指示を受けない点だ。患者とのコミュニケーションやアプローチ方法はアーティストに委ねられ、このプロセスを通じて制作やプロジェクトを展開していく。そのため、アーティストによって方法論が異なる。コミュニケーションを取らずに、空間から得たインスピレーションを元に映像作品を制作したアーティストもいれば、入居者と一緒にお茶を飲む時間を重ね、制作のアイデアを練るアーティストいたという。ディレクターとアーティストとのミーティングの頻度は週1回。プランを共有し、アドバイスを受ける。

成果2：遠隔地（アメリカ）でのレジデンスの場合、ディレクターは最初のみ訪問し、最終段階は行かない時もあることだった。アーティストが相談を要すれば、電話やメールなどで、遠隔から指示を仰ぐ。

オランダの働き方は、全般的に同僚や部下を細かく管理せず、個人を信頼して裁量を持たせている印象だ。このような動き方が、アーティストインレジデンスでも浸透しているように感じた。

成果3：フィフス・シーズンの企画により、袋田病院でアーティスト・イン・レジデンスが開始した。フィフス・シーズン側のスタッフとして、レジデンスのコーディネートを行う。

両組織の打ち合わせの遂行、アーティストとプログラム内容の決定、袋田病院でのオンライン交流会の開催、予算管理、契約管理、ウェブサイトの準備を行った。

大幅に達成できた

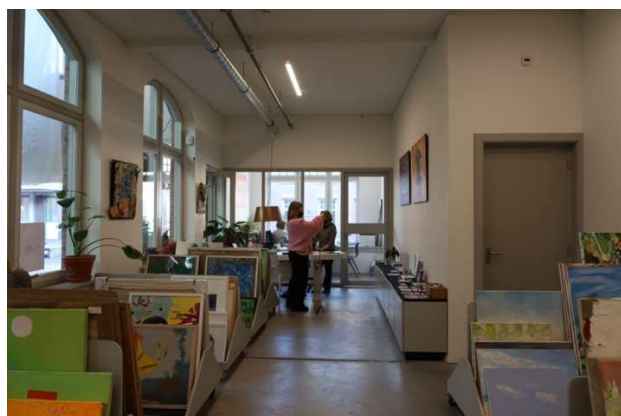
○第4 四半期（8月～10月）：社会へのアプローチ方法の事例調査、報告書まとめ

理由：ビューティフルディストレスハウスでの実習を依頼していたが、先方の事情で実現が叶わなかった。代わりに、フィフス・シーズンのディレクターが、非常勤で勤務する社会的企業「ビールデント・ヘシュプロケン」のインターンとして関わることができた。ワークショップも時々行われており、事例調査もさせてもらった。



ビールデント・ヘシュプロケン

110名の精神疾患のあるアーティストが所属し、作品展示、販売、レンタルを行うアムステルダムにある社会的企業。1階はギャラリー、オフィス、地下は作品保管庫になっている。



1階部分



作品保管庫

成果 1 : ワークショップの事例調査

1. 対象 : 家庭内暴力の被害にあった女性

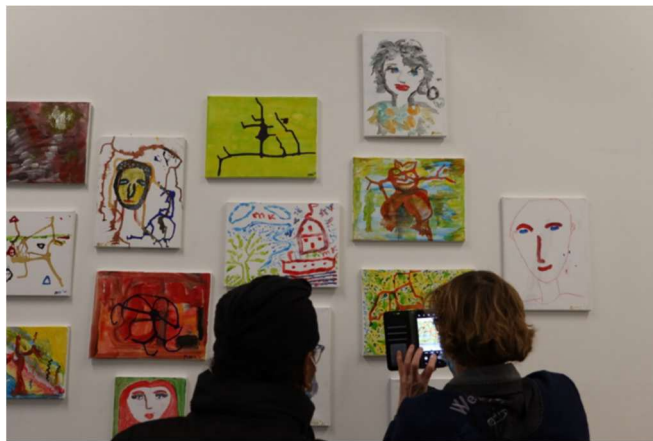


DV 被害にあった女性が参加するワークショップ

DV 被害にあった女性を保護する施設が近隣にあり、滞在中の女性が参加できるワークショップを定期的実施。

WS を主導するアーティストは、ギャラリーの所属アーティスト。アーティスト自身の社会復帰の支援もしている。

2. 対象 : 認知症の高齢者



認知症の方による作品の展示風景

認知症の方が通うデイサービスの施設で、アーティストが出張ワークショップをし、制作した作品をギャラリーで一定期間展示していた。

調査した日は、デイサービスの利用者が、展示された作品を見に訪れた日だった。

成果 2 : 精神疾患のあるアーティストに所属を限定し、作品を展示、販売、レンタルを行うことで、アーティストの支援、社会復帰の場になっていた。作品販売だけでなく、近隣の施設と協力して、ワークショップを企画し、アーティストに実施してもらうことで、社会復帰へのサポートをしていた。

また、オフィスや医療施設、自宅に、ビールデント・ヘシュプロケンのアーティストの作品を展示したいと、強い意志を持って訪れる顧客の姿も印象的だった。

ボランティアスタッフは約 20 名所属している。病気やメンタルヘルスの問題を抱えている人が多く、社会保障を受けながら、ボランティアに来ていた。ボランティアスタッフにとっても、社会復帰の一步になるための場であった。

○補足：ミュージアムや美術機関等で教育普及プログラムの聞き取り調査先

コンタクトを取り、インタビュー調査ができたミュージアム等は以下のとおり（順不同）。

下記以外にも、ミュージアムへ訪問した際は、スタッフやボランティアなどに話しかけ、簡易調査も行った。一部のミュージアムへのコンタクトに関しては、駐日オランダ王国大使館からの協力が調査の達成に結びついた。

【ミュージアム・アートセンター】

- ・アムステルダム国立美術館：エデュケーター（アクセシビリティ担当）、アシスタントキュレーター
* 別途、職員向けアクセシビリティ研修にも参加
- ・ゴッホ美術館：エデュケーター（移民プログラム担当）、エデュケーター（アクセシビリティ担当）
- ・エルミタージュ美術館：エデュケーター
- ・ミュージアム・ヘット・シップ：館長
- ・フレーマー・フレームド：プログラムコーディネーター
- ・ミュージアム・オブ・ザ・マインド：館長、エデュケーター
- ・デポ・ボイマンス・ファン・ペーニンゲン：エデュケーター
- ・メリー現代美術センター：エデュケーター
- ・TENT：エデュケーター
- ・松風館：館長
- ・シーボルトハウス：館長
- ・ナチャーリス：エデュケーション部門マネージャー、エデュケーター
- ・LAM（リッセ・アート・ミュージアム）：エデュケーター
- ・フリース・ミュージアム：エデュケーター

【美術機関】

- ・ダッチカルチャー：アジアエリア担当
- ・ノーチェ（難民・貧困世帯の子どもたちにアートプログラムを提供する機関）：ディレクター
- ・トゥルー・ドアーズ（高齢者施設のドアを自宅と同じデザインのステッカーに貼り替えるプロジェクト）：ディレクター
- ・ARE（アーティストレジデンス・エンスカデ）：レジデンス担当者

【ケア施設】

- ・メンテルツォルフ ウント デメンティー：ケア担当者
- ・オランダ癌研究所：アートコレクション担当者

C) 研修成果の活用計画

研修に行く前、美術館教育が直面するひとつの課題——美術が人々に前向きな作用をもたらす作用をどう伝えれば美術（館）、ないしは教育普及の存在意義を社会に理解してもらえるだろうか——について、私は頭を悩ませていた。自治体や企業の文化予算は減少傾向にあり、美術館経営は今後ますます厳しくなることは肌身で感じていた。美術館教育は、来館者数や収支で測定しづらく、ましてや効果としてすぐに表れるものではない。教育普及の存在意義を、数字以外で説得させるための材料が必要だった。研修を通じて、美術の有用性を社会に伝える説得材料や方法を探りたかった。

オランダでの研修や、ミュージアム調査を通じ知り合った人たちは、美術の力に疑念を差し込まず、まっすぐ役割を果たそうとしていた。わたしはこの研修で、美術の持つ大きな力を、もう一度信じられるようになった。今後、生きていくうえで美術を必要とする人、これから必要とするであろう人たちに、届くよう、ゆらぐことなく活動していきたいと思えるようになった。

今後も、様々な人を内包できるプログラムを実行したり、オランダでの事例を報告する活動に注力したい。具体的には、コーディネート、調査研究、執筆、レクチャーを通じて伝えていく。幸いなことに、研修先でサポートしていた業務を仕事として委託された。フィフス・シーズンと袋田病院のアーティスト・イン・レジデンスは、2023年秋まで実施される予定だ。引き続き、フィフス・シーズンのスタッフとして、アーティストのサポートや袋田病院との連携を図っていく。貴庁の海外研修制度を利用しなければ、このような展開にはならなかっただろう。貴重な機会をいただいたことに改めて感謝申し上げる。

2023年1月から3月までは、野村財団から助成を受け、精神疾患と美術の相互作用について、引き続きオランダで調査研究を進めている。オランダでも、燃え尽き症候群になる人が増えているように感じる。研修先でのスタッフが一名休職するのを目の当たりにした。職場や取引先の担当社の休職や退職で、組織が不安定だという話も耳にするようになった。このような時勢を反映してからか、ゴッホ美術館、ミュージアムオブザマインドなど、美術館がメンタルヘルスに関するプログラムをスタートし始めている。調査期間中に、担当者にインタビュー調査を行う予定だ。このような調査は、日本の美術館で先行事例を探しているエドゥケーターや、福祉の分野の担当者にも有効だろう。福祉の分野との接点も探りながら、研修の成果を多くの人と共有できるように、日本のオーディエンスに向けてオランダの社会包摂プログラムについて伝えていく所存である。

D) 研修国の情報（研修国の芸術界の現況、特徴、芸術文化行政等）

※主にアムステルダム、ロッテルダム等の主要都市の美術館の状況

【美術館の現況】

脱植民地主義について、美術館の姿勢が問われている。展覧会を企画する際は、多角的な視点を取り入れるため、バックグラウンドを違う人を意識的に混ぜ、時間をかけて準備をしている。脱植民地主義をテーマにした展覧会のみならず、キャプション等にかかれている言葉の見直し作業、作品タイトルやアートセンター自体の名称変更に至るまで、脱植民地化が及んでいる。

例)

- ・アムステルダム国立美術館：今まで使われてきたキャプションの隣に、現在の社会背景に合わせて表現を変更した新たなキャプションが並列されている。
- ・メリー現代美術センター：2021年にアートセンターの名称を変更した。旧名称は、ヴィッテ・デ・ヴィス現代美術センター。17世紀の植民地拡大で圧倒的な力を持っていた海軍士官の名前であり、アートセンターのある通りの名前に由来している。アートセンター自体は、上記士官の遺産や建物ではないが、それでもアートセンターの理念に合わないとして名称を変更した。

【美術館の教育プログラム】

- ・移民、難民を対象にしたプログラム、雇用の拡大
オランダの都市部は多様な人種が集まる国であり、アムステルダムは18-30歳の若者の1/3以上が、二つ以上の文化背景を持つと言われている。教育普及プログラムに関しては、美術館に来る割合が少ないと言われている移民に向けてのプログラムが充実しているように思えた。また、移民に来館を呼びかけるのではなく、移民の雇用や当事者にプログラムを運営してもらうことで、その人が属すコミュニティにリーチするように工夫している。

例)

メリー現代美術センター：移民に依頼し母国語でのガイドツアー

ゴッホ美術館：二つ以上の文化背景を持つ若者を時間雇用し、展覧会やプログラムを企画

フレーマー・フレイムド：難民が料理を作り、交流するディナーパーティー

- ・職業訓練校（MBO）の学生を対象にしたプログラムの増加
就職に一番近い高等機関のため、貧困家庭や移民の割合が多いと言われている。美術館に来る割合が少ないとの結果が出ているため、各美術館が取り組み始めた。

例)

- ・アムステルダム市内の美術館の教育普及担当者が連携し、プログラムを構築中

- ・ミュージアム・ヘットシップ（アムステルダム派の建築を紹介する美術館）：
木工に特化したコースと連携し、ミュージアムと学校を行き来しながら、デザインを吸収して、作業するプログラムを実施
- ・ボイマンス・ヴァン・ベーニンゲン美術館
館内に MBO 出身のスタッフがないことを契機に、将来の働き手不足への危機感から、プログラムをスタート
物流専攻の学生が、作品の取扱や運搬方法などの研修を受け、展示作業を行った。
- ・社会的包摂、ダイバーシティに関連したプログラム
認知症向け、視覚障害者向けのプログラム、メンタルヘルスに関するプログラムを、各美術館が整備しはじめている。美術館の紹介映像には、手話通訳の映像がついている場合が多いが、手話通訳を専門に行い、手話ガイドを育成する外部機関がある。

例) アムステルダム国立美術館：

- ・キャプションに差別用語がないか見直しの作業中。
- ・職員向けアクセシビリティ研修：視覚狭窄のゴーグルや、音が聞こえづらくなるヘッドホン、体に重りをつけて、展示室へ行く 60 分のプログラムに参加。レンブラントの《夜警》まで階段を使って歩いて行き、動線や作品の見え方を確認。さらに、車椅子を使用して障害者用トイレの場所を確認した。



職員向けアクセシビリティ研修。開館時間中に行う



レンブラントの《夜景》前にて

【その他】

- ・システム構築
美術に限らず、システム構築が上手く、非常に合理的な印象がある。例えば、アーティストの謝礼を算出できるウェブサイトがあり、個展/グループ展、新作/旧作、展示点数を選んでいくことによって、謝

礼の基準が計算できるようになっている。

・働き方

美術館で勤務するエディケーターやキュレーターが、残業せずに週4日勤務し、子育てし、夏季に長期休暇を取る状況は、にわかに信じがたかった。インタビューから勘案し、考えられる理由としては、フリーランスのエディケーターに仕事を外注し、ワークシェアをしている点が大きいだろう。企画立案や内部調整、予算確保、実現までは美術館スタッフが先行し、プログラムが軌道に乗ればフリーランサーに実働を委託している場合が多いように感じられる。ツアーガイドや週末のワークショップを運営するスタッフは、直接話を聞いた人は全てフリーランサーだった。